

化学物質過敏症(CS)

Q：衣服の柔軟剤の臭いで気分が悪くなるのですが？

A：最近、柔軟剤や化粧品などに含まれる人工の香りに不快な症状を起こす化学物質過敏症(CS：Chemical Sensitivity)の人が増えています。

現代社会は様々な人工の香りであふれています。特に最近、柔軟剤や化粧品などに含まれる香料で化学物質過敏症(CS)になる人が増加し、「香害」とも呼ばれています。

化学物質過敏症は、大量の化学物質に曝露されたあと、あるいは長期間慢性的に化学物質に曝露された後、次の機会に通常では何ら影響のないごく低濃度の同種、あるいは多種類の化学物質に曝露された時、多臓器にわたって様々な不快な症状を呈する疾患と定義されています。

- ①症状の再現性があること
- ②微量の化学物質に反応すること
- ③関連性のない多種類の化学物質に反応すること
- ④原因物質の除去で改善、または治癒すること
- ⑤慢性的状態であること
- ⑥症状が多臓器にまたがること

以上の6条件を満たすものと整理されました。

症 状

多臓器にわたる、様々な自覚症状があります。頑固な頭痛やめまい、皮膚炎、喘息などを起こし、シックハウス症候群と似たような症状を呈します。

特定の物質に対しておきるアレルギー反応とは異なり、関連性のない多種類の化学物質に反応します。また通常の中毒量よりもはるかに微量の化学物質に反応して症状を発現します。こういったことから中毒やアレルギー反応以外の過敏反応と考えられていますが、いまだに解明されていません。

患者は女性に多く7割以上が女性で、40歳代、50歳代に多くみられます。

化学物質過敏症そのものはアレルギー反応で起こっているわけではありませんが、アレルギー疾患の合併、特にアレルギー性鼻炎を合併している患者が多いようです。空気中の化学物質と最初に接する生体粘膜が鼻粘膜であり、その粘膜に炎症があれば、より強く化学物質の影響が出やすいのではないかと推測されています。

診 断

患者は色々な症状を訴えますが、それらを裏付ける客観的所見が乏しいことです。通常の検査(胸部X線検査、心電図、呼吸機能、血液生化学、血算、尿検査等)には異常は認められません。むしろこれらの検査に異常がある場合は他の疾患の可能性が高くなります。

診断する上で最も重要なのは症状発現と化学物質曝露の関連を確認することで、詳細な問診を行う必要があります。化学物質過敏症の可能性のある症例と考える条件は下記になります。

- ①化学物質曝露の既往歴があること(住宅の新築、増改築、新しい家具の購入など、学校、職場での同様の事態も含む)
- ②多臓器にわたる症状であること
- ③同様の症状を呈する他疾患が除外されること
- ④慢性の症状であること

以上の4条件すべてを満たすこと

4条件の中でも特に①の発症のきっかけとなった化学物質曝露の既往歴、症状発現と化学物質曝露の関連が再現性を持つかどうかを詳細に聴取しなければなりません。症状を発症する場所、条件があればその場所の化学物質濃度を測定する環境調査は診断の手がかりとなります。

しかし、環境調査や負荷試験は医療保険でカバーされないので全額自己負担となり、特殊な設備が必要となり、どこの医療機関でも行えるものではないことが患者にとって問題となっています。

治療

本症には特効的な治療法はありません。環境によって発症する疾患であるので、症状の発現を抑えたり、軽減できる程度まで環境を改善することが有効です。環境整備の方法は換気が最も重要です。窓やドアを開けたり、換気扇を使用して室内の空気のよどみを解消し風通しを良くすることで化学物質の濃度を低下させることができます。

また、発生源になっている家具や防虫加工した畳、カーテン、絨毯などを部屋の外に出すことです。

体調不良を起こす場所、条件が分かっているならば、それを避ける必要があります。個人防御として活性炭マスクの着用などを考えます。また患者の体調管理も重要で特にビタミン類(B類、C、E)の摂取を心がけ睡眠と休養、定期的な運動をして体調を整えることが有効です。

【 参考文献 】

- 1) 長谷川眞紀, 日本医事新報, No.4490, 2010. 5. 15
- 2) 化学物質過敏症支援センターホームページ: <http://www.cssc.jp/>